慶元拾遺大成

三

共十二

内閣文庫
和書 類
三五五八 號
一二 冊
一五〇函
一四 架

内閣文庫
番號 和 35558
冊數 12(3)
函號 150 77

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

慶元拾遺大成巻之五

一 大坂城中籠城人数姓名并 出生役付知行分付の事

一 青木民部少輔一之伝并子孫の事

一 毛利豊前守の伝

一 南條中務少輔忠成の伝并 隠謀露顕の評

一 薄田隼人正兼相の伝并 致道の沙汰

一 織田有楽斎之悪望の事

秘閣図書之章
日本政府図書
閣238

慶元拾遺大坂巻之五

大坂籠城之人数定の事

三万石 前ハ一万五千石と云々　大野修理亮治長

同　嫡男信濃守

冬御陣和睦之後織田有楽次男と云人質として江戸ニ来ル大坂落城の後此成敗之　同　次男弥十郎

一万石　木村長門守

秀頼公の乳母子ニ而秀頼公右府昇進之時任官

一万石　又渡辺内蔵助五月七日子母ともニ自害　渡辺内蔵助糺（たゝす）

大野修理亮之大坂落城之時
主馬後生捕来而同代根舎
方にて斬首

大野主馬首治房　三十二歳

壱万石　父薄田隼人と云ふ勅勘
の身にて主子剣力に任せ大閤
抜擢せられ武家となる小姓より
取立られ若江にて討死

薄田隼人正兼相

五千石　又加州大聖寺城主山口玄蕃頭
次男之関ヶ原之時兄弟とも
討死したり小姓組にて若江
にて討死

山口左馬助　二十七歳

三千石　太閤の時黄母衣の使番大坂
陣の時は黄母衣の落物番
武者奉行なり

郡主馬　七十歳

弐千石　父内藤左馬之助　秀頼公の
御乳母之子之若江
にて討死

内藤新十郎　廿三歳

千石　小姓の頭なる高名人

五百石　津田出雲守の子　弐八
郡百石ととも

三千石　野々村伊予守子

五千石　又平塚因幡守なる六月捕死
甲斐守紀彰
若江討死

三千石　大閤之時黄母衣
此節籠城奉行

弐千石　福島丹後守大夫大坂以後
京都相伴なる方にあり

弐千石　同前

今福長門守又一説には出雲守の
卯蔵後の子主次郎と号して
町人となる松永貞徳方に手習帰りに来る

伊藤長門守　二十三歳

津田監物

野々村豊前守

速水甲斐守　四十二歳

平塚佐助　三十二歳十

赤座内膳　二十歳

津川左近　二十歳

福島伊予守　二十歳

同　与三郎

今福掃部　五十歳

七百石　明石掃部組
　尾張之者　足軽預り
　物頭七日壬生の船手　堅に預
千石　尾州之者　足軽大将
　右同断
　同断　黄母衣
千石　古田兵部一家
　古田之内　右筆
　秀頼公に付
四千石　大坂合戦五六年以前物頭に被成　足軽三千預り
千石　吉つ書一家物頭
三千石　大島佐子

明石　八兵衛　清斗
湯浅右近
吉野清庵
岩崎勘ケ由
桂木六太夫
伊木七太夫
古田助太夫
竹田永翁
木村主計
堀対馬

七組番頭各壱万石

速水甲斐守
伊東武蔵少輔
野々村伊予守
堀田図書助
真野蔵人
伊東丹後守
青木民部少輔

夏陣発之節秀頼使者として江戸へ下る是を以籠舎
此外に
千石組
　夏陣前又有之一所出陣
　対面之上にて

織田左門頼長

足軽大将

房州安房守親類

右両人近江之者抱候

関東之者

相州之者 北條安房守

右同の時より居る出羽人毛利河内守親類ニして駒ヶ守り毛利ヶ源を継関ヶ原の時より浪居ル抱候なり

弓鉄炮之者を預ケ候来尾張者譜代者之

小田原者布施武蔵守之

右同之時抱候青木民部親類

木下法印之子 嫡子若狭守 二男宮内少輔 三男右馬丞 四男金吾 五男内記 六男外記 七男左京之後年改ニ遠州ニ候

佐渡右近河内守

奥州者松田利政親類抱候之陸奥守同朋丹後ともに支配

右同断者抱候

足軽頭ニ譜代者之

早川主馬

石川紀伊守

黒尾又作守

黒川但馬守

織田主水

細川讃岐守

本多掃部

北條内膳

羽柴河内守

山本左京

布施武蔵

青木主水

木下左京

佐渡主計

松田出雲

同 次郎兵衛

福富半左衛門

弓鉄炮物頭尾張者譜代
越後浪人
木曽元浪人
下方左近一家尾張者
尾張者譜代使番爰ニ
十九秀頼公使者ニ来ル
三河者使番
譜代者秀頼公小姓之
一色一家高家
譜代者使番

寺町庄左衛門
青木助左衛門
山田甚右衛門
萩田甚五郎
木曽長次郎
下方市左衛門
丹波左平太
小笠原左太夫
徳原三十郎
一色助左衛門
三上外記

尾張者七百人組ル大将格之者
父今太閤家之者今度討死
七之丞兄平井久右衛門後年
江戸出家隠高野ヨリ向出身
相勤リ
堺出身
孫右衛門
鉄炮之者五十人組ル初井村一学所
へ移今福陣場浅岡ニ御役仕手
高討死
物頭
上方者

梅原八蔵
同　三十郎
赤座三左衛門
平井七之丞
堀田五左衛門
堀長平
平野和泉
山本永之丞
葉原勝之丞

鉄炮百挺所司代築地城加伊
之時節ニて不乙合風聞仕候哉
結ノ疑ニ而道明寺ニ而為加勢
出陣跡ニて後落之討死候
次右衛門と云子あり
大和者物頭作大工頭中井大和
ヶ年ヨリ井井の名跡大工頭ニ成
侍五十騎秋田城之助組
同黄志ノ組後者
使番平野奉行ニ而罷
物頭組後騎馬譜代
使番箕輪の上手鳴野ニ而手柄
あり此子男右衛門と云て尾張殿ニ

井上小右衛門
中井次郎右衛門
秋田佐治之衛
安木八左衛門
平野勘右衛門
浅香左七
田辺与左衛門

冬陣ニ八使番夏陣ニ八鉄炮百挺
所ノ奥列者ニ政宗小性之大坂
と出て死ス
其同小性之使番大坂落城
後ニ石出子孫有
若使武田道安一家之由
小性大人所ノ浅尾ニ安房山城当
男孫
物頭荒木家之侍格之者
小性之ノ者出ル当罷

松田利兵
伊丹因幡当
武田左吉
安房少次郎
佐合九郎左衛門
生駒清三郎
茨木長佐
木村左斎

人数百程大谷刑部少輔子
罷出一戦
尾張者
以前土佐国主ニ而関ヶ原後改易
と号利久弟子茶人秀頼公
扶持方ニ預る
備前ニ而拾万石支配す
以前豊前小倉の城主関ヶ原
の後土佐ニ配流男女子共ニ大坂
三年以前大野修理方ゟ
密人来り申合せ致籠城

大谷大学（其子少中）
堀田武頭
村田将監（其子少）
長宗我部宮内少輔（其子余）
明石掃部頭
毛利豊前守（其子少）

太閤之小性之又指扇之肩
浪人之ラヲ以と呼掛ニあり返之
未孫きあり
安房守次男関ヶ原の後浪人
元甲斐之譜代ゟ去月招抱
元下総国佐老の里の者子ゟ助
家人筋之小条左馬之丈ゟ続
城主附岩切之老之後加友
たる故仕ふ
細川越中守忠興次男房城後
又忠興切腹ニ付
同人家人米田甲之大坂ニ
籠り後年忠興ニ帰参

仙石宗也
真田左衛門佐
後藤又兵衛
塙団右衛門
長岡与五郎
同 監物

後列者今川家臣比奈某之
者若党之時駿河ニて働き
其ゟ後上方へ出テ之身籠城の
人数を引後東福寺ニ生捕
小田原者越前ニ有之而召抱鉄炮
引ケ打及代々返籠城
しニ秀頼仰判を首ニかけ
討死越前ニ而正倫ト云

長部大学

越前新宮侍同名大和同若狭
兄弟共三百騎斗鉄炮

竹宮勘ヶ由

人数五六千斗り逆んニ而仕形上京
又ハ八人付加役ニ加

堀内主馬

足軽百人連鉄炮

南条中務

同断

田村操院

同五千人引連

工ミ千ヤ

正徳院

同断
此節後一筋ニ坊主百人
侍者侍五十人引ル後藤又兵衛
組之始政宗ニ仕後浅野但馬守へ
仕浪人ニて籠城与籠城ニ後
松浦壱岐守ニ出頭ケ

治徳院

奥列の者政宗ニ仕籠城後
上村民部ニ出頭ケ
侍三十騎引かへたる河村

河村新八

格モ有
此頃尾列の者加賀の
前田ニハ別家

前田主水

紀ヨし者別格ニ一組 塙川一重 古キ斗鉄ル

塙団右衛門

浅岡内守

右之通

同 浅之湯

一 七組之内青木民部少輔一之信

青木民部少輔一之又ハ加賀大膳ト云ふ
初浅井の与濃古渡邑浅野誠與之仕候
軍功有り後奥殿勝し長信長ニ仕後ニ
秀吉公ニ入候して民部ハ浅野ニ仕し
御先手浅野の其一人なり慶長十八年
八十六歳にして大坂ニ籠て卒ス民部少輔
ハ始而大膳ト云天正九年十八歳にして

今川氏真ニ仕へ軍功有然井伊引坂
細谷の音名氏真を麾下にし其合ニ一歩ふ
氏真没落之刻手疵負ひ城門ニ有
家康公へ仕毎度合戦の有時 家康公
上意ニハ栗毛の馬ニ乗り候若武者無名
使路ニも乙構の勇士有り何なる者ぞと
尋させ給ふ時ニ近臣の井伊直政取次ハ
青木中由云上候 家康公其比別
記有出者とも左云候 江州姉川合戦
ノ柳ヶ瀬ニ而青橋十郎と號今十郎と討死
稀走若成戚ニ旗を振指を帰り則家康ニ

候ふ處へ味方ヶ原合戰之節ニ而天神
押として加多ニ而在馬一手ニ而御附置
これ有り　押へ役ニ訴を押而不出に之
其後身上ニ而不如仰中之浪人にて無拠
太閤在馬所ニ而在之其後古田ニ而出
御使番ニ被召出無藤ニ而御附秀吉公
聚楽亭ニ而常の時民部少輔と徒ニ而後ニ
七組之頭ニ而被成大坂へ召仕に秀頼公ニ
被出御相伴和漢の御話為御使者後府ニ而
被下御知京都ニ而被下御返事下に候也
上意之有京都ニ而御供ニ而連枝金伴如

ニ而御附所之町人ニ黒ヶ谷ヶとゟ番民部少輔
大坂ニ而忠節を相勤候由ニ而八万石を大坂ニ而
切腹ニ而御附との上意ニ而大坂落城の
後新發しても宗伯と号し在京に而知行
のちを承之ニ而乃石ニ而相勤之在二条御城ニ
而百出又御家ニ而御出入御寛永年中に
能之七十八歳ニ而死去致し所ヶ所之の事
河原深谷と号し　家康公御仕味方
ヶ原御合戰之節御縮利不而為御を列
濱松ニ而為入御前七騎ニ而七度返
合申御手間ニ濱松ニ而為入御先金有り

上總ニ於テ源吾討其外ニ上意有之云
人数不知谷門内因通リ無之討死仕候源吾
重経と号ス他家ニ養子と成源吾の
吉郎ハ清重経ハ秀吉公ニ仕ル播州神木
ニて討死治郎左衛門一重生国濃州より
源吾討死仕候以後御三河へ参り
家康公上意ニ付而奉公仕候池田三左衛門
方ニ治部左衛門と申者頼候由御加
増十五年後家康公ニ召出候由仕
大坂両陣ニて永井右近大夫組ニ而御供
仕り元和八年江戸ニて病気ニ罷成

死去其子経後改直宥家光之大須賀
子源吾生国播磨之後藤ニ従テ五歳の時
家康公へ御目見仕出十五歳ニ而御又
民部少輔家督ニ従付同年分江戸ニ而
台徳院様ニ奉公仕寛永四年御宗門の
柳京殿ニ従テ甲斐国住居五歳ニ而
家康公ニ御目見仕秀忠公家光公
家綱公へ奉仕六十六歳ニ而隠居入道
し播山と号し播州高砂荘ニ而元和
二年七十六歳ニして卒ス同郡播磨国
園基ニ而則寺中ニ葬る大源吾寺生害

駿河出生次郎太夫ト云　古次郎太夫遊ヰ
継之ニ後鐘屋敷ニ宿代ゝあり(?)たりしか
出役致　後御縫殿ト云出代出小姓ニ成後ニ
定大清役ニ成以後　右御家御小姓代小姓
組支配ニ成後出小姓組書院ニ成後西丸出去
院番頭ニ成後仰付代極出例出世之ニ成後
出役を辞し家之向郷被仰付之　仰付候
一代ニ而始て出役ゟ勤ル
毛利豊前守ゟ傳

一　毛利豊前守ハ小倉豊前守小倉城主ニ候
御国ゟ泉乱ニ付依ニ死せんとまして妻子共ニ

然るに大坂の御合戦の催しを伝へ聞て
大坂籠城 但御合戦之ふ　我父家ニ中ありて八我死ニて
死後せしまで我なき書の書子ニまさに此後の
苦しきを我らき事の限りをつくす事
皆我か為に泣り我人ゟ劣らを
ありとこそ云家ニ出し難しと云
妻の云先世の宿因今更にあらす
妻ハまよ従ふを以て侍ふ丈夫の心
ゆゑんとも云代あり前々の如く我武者を待へとす
皆に云代わり配境の波濤に屍を沈ん
事御々膝下一命を君に報ふにあらん

とおもふといへしを敵此舘を出すに付ハ
定て国をより攻て妻ようきうとの
事をすれもんとて云て間を恥し妻ハ
第て云勇士たる者の妻かくる事を
いふりんや此暁出船して武名を潔く
しめし君か為に敵のこゝあれり源の事
云かふれいかゝもおかして親子ある云に
此舘の梅かぬ泪よ流むよし君か運の
因出家ハ姫て候ひまんたるきなくて
又遠ゟ豊前勇士て小船よ掉さして
大坂よ参り籠城しけり其後めでたの

對馬守ハ妻を先付て源を恐くきり
ともよて逆ん　神君甚しく勇士たる
者の志神妙の事なり　感あるハかまて
羅まてはして扶よなり旅よ對するゝ妻
子を城内に入べきよふとなり

南條中務ヵ侍妾鼓遅の海に

一南條中務少輔元知ハ父ハ備後南条の
城主南条中務少輔元明と云大友
続後等合戦の節攻て尋る事都
つとて近秀吉公に仕て云し九州征伐

時再ひ南条の城主となる継忠病死の
後太郎か代に及ひ関ヶ原の時石田三成
に党し依て所地没収せられし元
忠より大坂に入て秀頼に仕へ
給ふに極月始城中にて南条中務
反逆の由ありて誅伐せらるる時彼中務
同意を忘却して密に藤堂高虎に
通して持口の柵木を撚切おき
人数を引入るへき由を約し支配し
おけり中務か子主之助一家に籠る兄を
見付不審なりし故に此旨を持口

頃人織田左門頼長方に訴へけれは依て左門は
中務を招き是を糺明せしむといへとも事
露せし時に中務か家人を縛り中に出し候
中務か家人の穿鑿ハかねてより有り西川隠岐
元郷といふ一列の持口にて候其を見届て
其旨を申し候左門か同隠岐守ハ足利将軍
の簾中細川右京大夫晴元嫡孫にて筋
目正しく大名なりしてさる家臓たり今中務
於けるに何を申分して人織田大家も
由緒あるに中務経知る如く何を科を
楽に探せんとせらる事に怒り頼りに

謀反人と披露し同十六日忽中務を誅戮
せしむ此中務ハ自分の陰謀に与り始終
主人中務かつて存る事にあらすとそれ
古巧にて知主人の罪科と於て右衛門の
と去連して自害したり斯して如去
主人の旧名を恥かしと思ひたり中務殺
害に及ふと云其子重三郎忽自害し
たり然れ中務首を八郎郎に渡す首を以てたり
同日中務反逆の事秀秋公に申上
の志ありしを聴と給ひ感じたまひ
死罪せしむ御意なりと申読書は

但馬守と申事紛れ少々皆同是ハ
小幡勘兵衛大坂に籠城しけるか
関東へ忠節と申ける後に隠謀
露顕の上にて曲條にいとく何を
今に家康公ゟ近付存ん為に
少様に斗策仕候由申しにといへ
是忠義と申せんや右様の忠義を思ひ
主將ハ甚田に又後藤木村杯を為
合て誅事いふへしともあるへし
元来秀頼へ懼もありしと様
主人は懼を恥さへ不人倫の道

形り縫の難きハ丈夫にて妻子を
書ゐ置るを近侍させ大君をも忘れ
関東へ内通ある事又然るべくして
却て我身を亡ぼすに井勢か子ならで
秀郷に仕へ時に捨置き秀郷も
其情深し又井勢ハ若党相家る
放来に内縁ある者も心中に遠く搦て利
運の上ハ一子一城をも与へしと
堅く約し其若党雑き謀をめぐらし井勢
父を隠匿に出させを定めまたん十一月
六日夜城内へ忍び入り東条搦口分

若党井勢を悪くて城内に引入れんと
約束を結びて其子息 又若党ニ云 是を見
其悪の王君に対し逆心を企る
事を深く我御知らば御意を流し
心憂き事を見んとし 其子ハ丈夫忠孝に
重き事なりし父子一所にて父を殺害
せハ不孝の悪子と名汚さん所詮
我身を殺し果んとて父の武名汚
れし上ハ我芸にかくれなし撲を
切て忠死にあらざりせば退度に
家わぬ徒者なり 忠臣ハ二君に仕へ

其後主君父の恩顧をかへり
みる事悪深増之越堀井の
士卒何万人ともなり難く従に
命を乞さん事仏神も免し給ふ
為しく勘当坂井勢に誅せらる
其上以と在門なりし〆他の
口より流れハ又其上ニ罷出ぬかれ
難し又も兵命惜しむに似たれ
武士たる者ハ各〻取り計らひ討戦
秀頼公ニ言ル秀頼公ニは上意を
か君前へ流り其上ニ出蔵まいりし公

織田有楽大野修理に仰付
糺明ありしに隠謀かくれなく坂
井勢ハ堀井かく誅せられ其主節
と同時に切腹せられけり惜むべき
忠死なり

薄田隼人か情

一 薄田隼人正兼相ハ其父ハ薄田中納言と
かや云ふ公卿にてありしか卿罷て
勅勘を蒙り流浪せられしか子細ありて
秀吉公に扶持せられしとや其子劉備に

しく天性勇武にましませば武威に服して
られしとや
一説に藤田隼人隠深の事あるまじく
一旦秀郷公の忠に富を家り仮返
みまく主君を遁経人の中に隠して
危きをまぬかれ主君も又これを
翻しけるといふ説あり此義いかゞ甚當
藤田関東に内通虚説の故に大いに
たり此後ハ秀郷公十二月嫡子隆に
大膳理を以て連此家藤田を去ん
平膳を燒掃歎の役略かりしめんと

ちに藤田氏のふといへども却て
関東勢に追立られしかば秀郷の
ふ覚の名を残せし後に此家の勇
ゞ関東に及ぼしたり當城ハ一の
要害成ゆゑ猛勢を以て攻めたれども
いかでか一戦にも及ばず剰へ郎切
たる味方平子父子討死しけり藤田
志人の不覚より出る故か當その故
陸奥に居り頭ふる関東へ内通の由
を告る者あり且又味方の
勝利を妨ぐる猶以海来りけるを

糺明して云く深く心へきよし
上意以の外なり大将修理亮の組下
且又に此旨を述べよと某まて織田
殿の家方に是寄り此事語り玉ふ時
右家臣ハ織田信秀の子息信長
深者其益ありて武功の誉れ智
謀も深き人なれは諸人是に帰り
又前田ハ勇猛なれは足ても気象
き男なれハ此上意ハとも是に廉忽
の振舞とてなして大野も従ひて
皆家にて讒かり右家か同前田か隠様の

了通従成るつきか此人に頼みてハ
家来ありけり如あり其外平野
と様焼ての功なりけれ又此家佐々
か渕家なりよて居り諸人これ統
極しむなりけれハ身に帯て前田か
逆心といふなること是皆所為佐藤
同上野の智謀めく前田事悪名
をきせられる事なり又野佐々か
渕勇ある成しといへとも合戦を
しけるに不阻強とて其中に数度
いへハ其度此前を継様如し前田

紀明経道へ入りけれハ諷しつゝ深く其事
を以楽とし兵法よ性武運の為手
成りき其後秀那云の其臣なり
錦金よとも深く尤ゝ也けり程後を
那しめまし人たる者の道ハ第一
以て利し利を以て理とせハ仁を
背ものにて好みしつハ大那ハ乱を
同し継よし八某も人をりゝや上へるよ
此承門まうて書表法其法在や
為しとき先より安人此前に出よ不安
理を以て相互に好しつハ前田危き

を備ぬりまたり其後修理ハやしき
出火の時前田其法那ょうありしり
郎前利隆在ゝ所総支絶村辺
長政那との軍云城中へ迎えもん
とあるとおう那前前田殊く防きし
りハ法軍攻めらんて聞ゝ成なり
其事切よ其秀那云よ此戚むつ御
りかしりハ道明寺金銀のとき
いさきよき討死し名を後代よ
輝しくる

慶元拾遺大成巻之五終

慶元拾遺大成巻之六

一 真田後藤武畧并小幡勘兵衛景憲古戦ニ付問答之事
一 大坂籠城の評論
一 秀頼公大器有無の評
一 小幡勘兵衛景憲事跡
一 真田左衛門幸村軍術之評
一 大野治房武勇拙きの評
一 真田後藤軍功の評

慶元拾遺大成巻之六

一 吉田後度武畧小幡古鐵門問答

斯て城中諸大将於諸評定區々之時ニ
大野修理亮申けるハ先年関ヶ原合戦ノ間
大御所極メ遅滞ニ付先手の諸将たる気
を屈しけり是を考るに生得経廉の
大将なれハ大坂籠城の事へ相ハ大きニ
疑ひしニて早速発向ハあるまし 京極よ
味方数ヶ所の城を攻落し後ニをん安り
しニて人数を分ケて京都へ発向候井

を放火し板倉を虜とし丈夫より近国
の小城ともを追つて責落し或ハ味方に
属するもの多かりしか此頃本国にて上杉
又景勝ハ治長の詞を聞て頻に出陣を
大荒メ之関ヶ原の時にも彼出羽の最上より
しまりハ西国方に味方の諸将敗れき
害分きに付疑を晴して其の後出馬
あらんと思ひ居しか今度の軍ハ天下大名
悉く徳川御一世威強大なれハ寛仁の
御沙汰ありて彼是も人内に宇治勢
田を出陣すれ共ハ越後の合戦付と

ゆまし能々仕ると書越しと干時豊田
左衛門佐幸村ゟ云越後の詞を聞て頼を
存如く後度と其外人数一二万も出所ヶ
如此ならハ先石田の宿より此方を討ハ
一旦も残らず焼拂ひ東西勢善悪の
係りを失ハせ居付所をおはれ人給ハ
一戦に利をうしなへし又宇治勢田を焼落
し船を碎き捨て間者を出し陣を
思ひよらず難説を言ひ又ハ夜毎に出兵
を繰出して夜を寝させ又ハ退屈を
さへし又長々敷征戦を失ひ将しまして

七組ニ分の武将を定め大和路より伊賀
伊勢へ廻り上洛勢を支へ援をうたせ給
はるへし是君と出るまてハ太閤の
明智孫の吉例に倣せ山崎表にて殺
出され天王寺に争ひ而篠をとられ
毛利豊前守勝永を大将として七組
の内を遣して先手と成り伏見の城を
責落し夫より泉州へ進入致して
板倉を退出させ宇治勢田の味方力を
得ん又明石掃部木村長門大野ら馬
共を添て大津辺に出張させ瀬田の橋木

を構へ置く備へ人に東勢何程陣へをも
とも遅に疲れる人馬を気
向働く兵士卒ともに指揮して自身出張
まし若敵川を渡る時ハ渡る勢を討て
働んともとも遅の足にて取るへし
を取東あたハし京都を乗取て敵を
発せハ一戦に利を得ハ其時ハ軍利
勝きにおゐてハ其時籠城して再も
六万も討て出戦ひ或ハ夜討して利を
得ん是等を先謀術とせんと言上させ
やうにや申ける処とも大将御四辺の人々角

篭城を好むに偏て堅城ハ地形と云城
郭と云日本第一の名城なれハ軍兵
六万ニも余る程ハ此山まで入置し事
難なれハ五年七年籠城すとも何しか於ひ
有るへき唯内より謀叛の変こそあらんと
云けれハ新参者の中に小幡勘兵衛景憲
遠未在にまかりしりそく出て云某も
不肖の身にて候へとも此東原より出向
此評定承り候上ハ君の御為そと存候
反復申上候諸大将の御評議
此條 大御所極ての事ハ致方の合戦に

判のひ陣に婦川小牧関ヶ原本の戦に
何も御利の事微妙の智謀人の及ふ
処にあらす此後評定で通は年経
の大将なれハ今度関東の変出れハ急に
参向あるへし此時御人ハ宇治勢田の橋を
引或ハ御味方大津に要害を構へ防戦の
術を施へとも首尾宇治勢田橋を引
合戦せしに軍利を失ひし事先治承の
古し源三位頼政父子宇治川を前ニ
関東勢を防ハといへとも足利又太郎
忠綱先陣し川を渡し頼政ゆかず利を

先ニ又木曽義仲今井 根井木曽ニ宇治勢田
ニ落きし範頼義經を防りしも依て木
曽總梶原景季畠山重忠先として川を
渡し木曽敗軍まて承久の後鳥羽院
也謀りして官軍より時官軍宇治勢田
ニ向ひ左馬頭總井山左衛門重須安威
三浦廚右衛門家末先陣し川を渡し官軍
敗軍ハ建武四年足利尊氏上洛の
時新田義貞楠正成宇治勢田の橋を
引防戦せしも軍利なく敗走し
たり況や今般八月初の軍勢諸方より

攻入らんとかくし三井防くときも後陣合
敗北して結局一同ニ敗走し又大津辺ニ
要害を構へ所々の御出を設まて戦
はん事叶ふ間し まて跡ハ板倉伊賀守
松平隠岐守兼て江州辺を思ひ定め
大御所の上洛を拒む敵あらハ追討ん
と用意あるよし况及てたあらハ味方の
御出ハ却て敵の為ニ虜となりなん事必
定なり初度の合戦ニ利を失ひなハ
味方の従軍立道を拒くものこよなし
也其意なくして只城中ニ籠城致さん年も

十年も敵を堪へ防戦せハ西国の大小
名味方ニ属するものも出来候ニハ運
を開かんとせしか中々さ有れハ修理内蔵なと
自分の何ニ叶ふを以て動揺の呉らんとハ
感するニ依りて秀頼公も此方へ来出しハ
無用なり只籠城して何ふより攻撃るニ
おかへハ防戦すへしとなり依りて籠城ニ
决る

大坂籠城の評

一 同く日大坂籠城の前 秀頼公の御前ニ
おゐて軍評定這てありしも 諸将一決

せんしてもかく変するも なりて居
なりし敵を受るニ 虎挿事是上策
なれハ又軍術且ハ秀頼公の智
謀なれハ大坂鎗利しとなりへき事を
いかに吉田夷謀にもれて戦場なんとする
関東の下知を受る 時ハ利運あてなき
ことのなり軍事ハ大将にまかせらるる古今
の道なり秀頼此時も智ありしハ其国後
度々中条にも籠りし軍配ゆれハ
叶ひぬ返を真田後度を 守治勢田ニ出て
あそふハ稲所大津松本迄坂面あやしく

要害を攄へ西村をつきて二三方の軍云
をなへ板倉伊賀守を押へ又紀州草津を
焼拂て御利せん事たちまちなる軍
配なり是ハ不論勘之害ゝ勝ゝ宇治勢田
の古戦を引て源三位頼政木曽義仲
運拙くなく負軍を請ましくも頼政
ハ老武者也仲綱義経の弟ハ三経武士
なるなく餘ハ皆三井寺法師拯て衆の
内瀬の味方なし又木曽義仲ハ當なる
山を裂勢ひハあまりとし猛多なき大なれ
なれハ兼平一人役なく諸軍勢波

なり川を渡され討負ける時ハ戦場ハ
さ時くよるゝ御も負ろともあるなんそ
先例用ゐんや大野源迎安人の不覚人
小膽り勢ゝを用せる吉田後藤も覚班
とならき丈川を隔て戦ふまハ古典の
法よく大事あり楠正成と是を知し
なり古傳兵法ニ弓取川を隔て戦ふ
事若し能て合戦多井ニ入その大事を岩
所の習より先始ニ忘ぬるなりされハ
吉田後藤り云ことく宇治勢田ニ而て支ゆる
事上策といふへし 孫子あるハ大野源迎

ともしくに見をとゞめ木村か家に登せ
明石掃部七組の内をも大和路に向ハす方便
是ハ見聞計ハぬ時に鉄炮もへきに
纔の手勢にて関東の大軍を支き
受し事固思ふ処に及ハさる構り
鉄炮にハ仰るへしとて此時吉田後藤
小幡に向ひ又鉄炮の便りと云ハ後浩
ありて当たる敵を委猶にて込み付り
又猛雅の嫌に当せく居候の場所
なくある事ハ当手ふ猶の便り悪敷ハ
尋常なくむ道理もあるま此次ハ天下の

軍ふと敵に受ての合戦よの作法の
ことく鉄炮ハ方りへも御利あるへくしとも達す
きらめしりもとし秀頼云を初大野修理
鉄炮を好ますし有用ふれし若
吉田後藤り見に仰せハ假令御利なく
ともし此合戦今三年ハこらへし新条
者ともく後藤吉田を用ゐさることを悪之

秀頼云々聖賢有無の評

一 同く田秀頼云の行跡人となり是
骨柄ゟ伊也ににや者田大形の嘲むへき
事ふありにハ文学二ツハ是悪ぬく

一

無欲にして下民を憐み勇ありて経
済の才ありて諸侯を治むるには智謀有て
軍道を知る者を知る人は器量を
失ひ無を正しく置て恥かしき事
明らかなりや秀郷は文武欠るなく一ツ共
初めより文学を好みして二ツ共は乱世
濫妨を好むものは上を学ぶ下ありて
此道第の諸士器量に同じ又勇氣
はまりましてくして為経感え其後は将相
萩本に返りし此七組の要を遣して此勝を
中より田将相承君の科勢し此勝敗とん

石返さまて拠りとて上は秀郷も此権略
損しを治むし八七組の者共何も同意して
従し命を知しむとも々たり猶も上は
忠に此眼前の乱気猶も侯世出城は
施しけり器量経定と云十一此軍
いまさ組する明前中にて吉田後攻本
村織田常吉根拠々謀を定めて中
さらめしたる器量を用ゐるには取時
吉田後攻去勇兵敵木御前中に八
此取組軍敵天王寺に此足軽ありて
此備定まらざる処に道寄して一戦に

御貢を贈らんといへとも秀勝是を
受入されハ大野も又同人せられ是軍に
うとき故謀の為をたつさハ是不利
の沙汰なり柳か是志田沙汰成しぬ扨
大きに悩まされけり
或書に曰大坂籠城に柳秀勝公
篠原又右衛門と云者御召して
海々生国淡路なり偽て案内知
るへし又親類国々の者もあらん
是をかくして同人の者ありて
此城を責破る謀を勧め申せし

是に依て当社を定め九州の
往来を塞きしに令せらる
故に篠原内々にて是を伴ひ
しかハ前に味方に属せし大野
修理是を受海を隔ての働き
人に下す今篠原の時すを仕様
しけれハ何つえと制して支度の
船とも是を焼捨しハ篠原か斗
略いたしけるに故に云々按ずるに
是秀勝公の人数ならず生捕られし
たき篤実なきよしもありし

小幡勘兵衛景憲か傳

一小幡勘兵衛景憲ハ甲州武田家ニ出
たる者祖父ハ遠州葛俵の住人なりし
小畠孫十郎虎盛入道日浄といふ者子
小畠織部と云也父子甲州へ来り武田
家ニ奉仕す織部後ニ山城守虎盛と
号す其子小畠又兵衛ハ信玄の命を
以て上州の小幡上総介か庶子ニ准し
小畠を改て小幡と号す信玄
海津の城ニ住す其嫡子孫兵衛と云
是ハ其世伜男勘兵衛景憲ハ孫七郎

と云ふ元亀三申年五月朔日生る寛文
三年二月廿五日九十二歳ニて卒
天正十年武田家没落の後甲州諸士
徳川家に仕ル此時景憲初年十一歳
秀忠卿と一同ニ仕ル出井伊兵部少輔
ニ附られし彼井伊の家ニ甲州の古老
廣瀬三科早川等従属せしも早川
弥三左衛門ハ山本勘助入道道鬼か云ふ
を言ふ坂ある場ニ傳受す小幡か因て
して門貫と嫉て早川門弟となり傳来
勘兵衛ハ是ニ習学して後五郎兵衛中

まして武者修行に立出る所々御氣
色家の後井伊家に至り居て
関ヶ原の時井伊直政ニハ下野寺尾岩
江を使ひ鴻津り備へ寄入戦功の時
後憲母衣武者ニ付得れ共相勤
剰ハ名乗なく以て浪人して佐和山ニ
居住し今度大坂籠城ニ付浪人
ニ召抱り付出京し諸司代板倉伊賀守
御見松平隠岐守方ニ来り某討取候て
大坂に籠城し城中の謀事を告密
方まて相告さんと又て諸方便あり六

見を聞関東に君前ニ伏して討捕へく
て籠城するニ於てハ却て敵の為ニ
成るへき事を逃しむる筈ニ候ハヽ
城中に入て謀らんと云ふ人有へし御
前ニ於てハ何分敵方ニ伺ひ参下し給
諸せし負城中に内縁を求め加賀
相れ共評定の席ニハ召抱られ出座
勤る諸反筒の色ある者修理内蔵助
木に使り為頃よし夢れハ元来甲州流
の軍法兵法の主の事ハ乍内蔵助
修理見を招き評定席ニ出る事あり

君の為評定すへしと申付しかハ今日
末席に相加り斬々の籌を運らし論する
所吉田か考へ置し軍法と引合せける
ニ替あらさりしとなん

一　吉田幸村軍術之評

吉田か此度石頭をもて放火して東西勢
の居付所を討んとせし事ハ先年文安嘉吉
昌幸の偶に関ヶ原の陣後の勤氣節り
る野の久戸山の梺也秀ヶ宿に又と云に
執居ル安房守一死去前に云敢其病

至難しかハ死去遁るゝ隙も一命の秘事
あり是を用ゐ得して後に死せん
やと云れ共所以之に立名ありハ教訓
後学のためなり是彦と其尋すれハ
勝か及ふ如にあらすして幸村かいとく
未だ若ふ者に得ると存けるによ
加ゐ於き者々也後しめふするてき返
すし秘入てゆく取たりけれハ安房守
か日勝秘を順り来れハ是勝を庸愚之と
とひて敵志を趣るよ迎を敵ハ老功
成る人に伝せらるゝ故に詞ハ人と云れ

謀計も人ニ用ひらる故か思ハいま
敵ニましたりとも戦場の数を経ま
さ迄ハ名君も敗れ兵を御れハ金ミも
人味ハ良策も又人用ひハ同様の
兵論を立て見てもあれハ何すも益
なりとふ故ニ論するまじくとも
此ヶ詞歌りしハれハ是を謹り味ハ
今三年を通ハして関東大坂の合戦
起るし御ハ必要を指示いれハ
語し出るニ籠てハ謀をあらせまん
る必定なり其時軍配部方ニ有り

語合て美野ヶ原ヘ出張して関東の
軍勢を支えし是要害の地ニも
ある事る御禦の城塁ニもある事も
要くの彼ハ武者なり御れ共欺武略
の彼ハ安濃所ニ兄其通ぬ迄ハ
抱方其方の軍勢とも川に破り陣ん
とハ仕ふまし代海水を留めもあら
為し斯の要害ニる内ニ兵を細くを
何迄根子を取り難く門りまさ
勢田の橋を破り震みて又一手せハ
元十日ハ東軍を防ニ退散せめん

此時安房守関東の大軍を支へたりといへ
畿内西国の諸将運を安堵よせたる寒
多かれハ大坂ゟ来らん者多かるへし然れハ
味方の軍兵七八万ニ及はん其時兵を
起し二条の城を焼払ひ大坂ニ籠城
して防戦を稠しく敵を待ち又軍を
掛合ハ東軍退屈せん其上ニ折々夜討
抔して味方ニ勇ミ追討ハ関東の大軍数百
限ニ狼狽乏しく敗軍なを踏ふよ
はん其時太閤恩顧の諸将を招けハ関東ゟ
初従属したる者を限ニ大坂ニ随ふ

せん然ハ大坂方勝利となるへし其方敵
の志を汲て大坂ニ於招き此策を説とふ
ことし年若なれハ大野と用ひなハ又
後藤内蔵助未道も不熟練の者ニて
庶人なれハりて信用其事なきこと深況
甚多や果して大坂佐太の謀策を中ニ
いふことを見を用ひさる上ニ小儒か又簡と
用ひさる上ハ小儒か又簡を拳ニて籠城ニ於
至れり

傳ニ曰斯して籠城ニ決定せるゟうへ
織田常真の子も叶ハ孫鈍兄角

関東に家康公御座まて先達る通し
立て十月六日の朝辰に大坂を
立去り小船に乗り淀川へ出京して
旧居津田無庵宅にて諸用代相会
方まて案内せり依て城中にて
勢大将を立んとおほせし以来
是に而る家には有楽斎の次将
織田有楽門頼長の卯将し是従居
下の従臣するを以て大定むる秀頼
の母堂淀殿の従者なり

一 大将渡辺武勇将き浮
同じ日大野修理亮治長渡辺内蔵助
なる人花に種々思案ありて武藤城の自
害にも仕出したるも将く織田の相に
御供しけり左相にけり又大将ら門前の相
一旦事終将にありけり其後日付合戦の始終
大野渡辺ら武功一も無くけりとも其れも
時の運に寄り補正殿之負たる軍の時なれ
ハ勝負ハ定め難しといへとも好人皆に世知
賢く軍ハ不時の者なりて如何鳴将に向し
比一島に逃ありけるとて城へ入せし

いはゆてと討ゐも安き修理の亮
大野か父ハ治長ニきれ
合戦なく大野ニいやる如何せハ
修理の亮てと軍治長
渡辺か字名を流ら勝而
敵ニ負ふてハ同し如欲
惜労か測ハ子らく波こうこふあ
石川の瀬ニ落る薄き田
右の狂男めらふ敵味方の相等ひ
ら敵し及重るを虎と味方の征ニ謀叶
備りしも大野か経意よりなきりをす

將り又ハ先陣前ニ和久ま先にかと事あれハ
きりしまるニ大野渡辺秀頼へ告て先
やせしよりも木村後藤の如く人か皆く
和久を早く進ま下れるす一家囲しかれ
ましまあハ前地ニ籠る初らり味方とかし
も利將し剝へ文武を備へし停桐石門
敵田將らハ佐不富と家り主退し来事
足全く益れく寛の失とゐへし今宮東
勢ら味方を斗るニ此籠城一力か二利運
あるへしとハ出いれ去り能るニ何の敵あり
て政宗味方ニ組せんやゆとらゑ目本を

申婦人に事頼んとの事なり芸備負
も志きさる計なれは志をとゝのへんや今一人
あつて大切の味方なりと存し政宗公は
庶也せさる時は殊にて和久を招きけれは
とかくいさめしかとも大野治長公は
して終に奥州へ帰りし事のことくに
和久は取りて鏡とすへき事なり今に例
しなき腰抜なり

真田後藤軍功の評

一 大坂籠城の内真田に勝りたる勇士なき
やうに申は誰れしも真田後藤と連の

安藤の振に移りまたなかりけり同時芸州
回郷のことく安人芸に大坂籠城に入るところ
安人は但し去る事あれは性悪にてなきとの
みて末代士の悪しみを知る後藤又兵衛
井伊直孝に備負せし時井伊を討して
役かれは後藤長くさんと追詰しに大久保彦左衛門
見とかく井伊を助けんとて以上二三十騎にて
後藤にかかる又兵衛只一騎見て姫せいて
殿をともに戦ひ難儀して後藤
等一の戦功なりとも見え得へし戦記
あは見を記され真田事は近代わかれに

まれなる勇士なり太閤の幕下に属しての
誉もあるにかゝはらず将軍家に一致し給ひ
なし変せさるを人倫の法とぞ給ひ変じ
道に違ふハ人にあられされハ義懲に
御時ハ非道といへとも武功をなせしその
殺あるなり或時叔父の隠居せる所をまき
上意を蒙り従悪一旦痛ましきのとき
たゞ日本を東西に御預り従来に御座も
此味方にハ兼ねてより今より對面も
彼是まして隠居せるに切り或
大御所極盛あつてしとりや是をも彼

老ふるまゝ小傭勤為ハ京都まて板倉
伊賀守を浪人として大坂籠城の内宣
しく謀斗を廻らさるゝ事しと関東江の
忠節に似たりといへとも平和の後成賞
なれし一旦是ハ返り忠に同じされハ秀頼
の不利因花なれとも是を反せさせ
吉田ハ却て無双の名士といふへし

慶元拾遺大和巻之六終

国立公文書館
National Archives of Japan